

(1) 表紙

博士論文（要約）

論文題目 中世後期の日中関係史研究―「入明記」からみる遣明使節の外交及び
貿易活動―

氏名 オラー チャバ

(2) 目次

序	中世対外関係史における遣明使節と「入明記」	1
	一、遣明使節と入明記—背景及び先行研究	2
	二、研究目的及び課題	5
第一章	日本における遣明使節の準備過程と「役者」の人選—『蔭涼軒日録』を読む	
	はじめに	1 1
	一、亀泉集証の主導による役者人事—正使・副使・居座の決定	1 3
	1. 人事の難航と自薦の東帰西堂	1 4
	2. 真境性致と戸嶋若狭守—役者人事との関わり	1 5
	3. 「虚頭漢」の戸嶋若狭守と「迂疎」の人事	1 8
	4. 正式な役者人選へ	1 9
	二、居座人事の諸問題	2 1
	1. 東周興文の辞退	2 1
	2. 俊仲周鷹の登場	2 2
	三、硫黄使節の人事—役者の出発前の任務	2 4
	1. 硫黄使節の準備	2 4
	2. 硫黄使節についての議論—東帰光松が候補に	2 5
	3. 硫黄使節と居座の出立費用	2 7
	四、居座俊仲周鷹の土官への任命	2 9
	1. 周鷹と宇治円音寺の押領問題	2 9
	2. 堀河殿と「都官之事」	3 0
	3. 俊仲周鷹の書状—その解釈をめぐって	3 0
	4. 「先規」の問題	3 2
	5. 「土官」という役職について—俊仲周鷹の認識	3 3
	五、正使死去後の人選と景徐周麟	3 4
	1. 正使仲璋光珪の死去—金溪梵鐸の推薦へ	3 5
	2. 将軍の「能僧」へのこだわり—景徐周麟の選定	3 6
	3. 景徐周麟の書状—正使の辞退へ	3 6
	4. 亀泉の将軍への報告—辞退の承認へ	3 8
	おわりに	3 9
第二章	入明記からみる日本使者の中国における活動と職務の多様性	

はじめに	4 4
一、明と日本使節	4 5
二、入明記からみる日本使者の職務と中国における活動	5 1
1. 『初渡集』に現れる日本使者	5 2
2. 『壬申入明記』からみる日本使者の活動	6 3
おわりに	6 6

第三章 遣明使節と明官僚との文書往来—入明記所収外交文書の内容、様式、作成過程

はじめに	7 5
一、入明記所収の外交文書の内容について	7 6
1. 遣明使節に対する明側の待遇改善を訴える文書	7 8
2. 貿易活動と回賜に関する文書	8 2
3. 外交業務に関する文書	8 5
二、入明記所収の明側文書と日本側の返書	8 7
1. 明側が出した文書	8 8
2. 明側の下行文に対する日本使臣の返書	9 0
三、日本使臣の「呈式外交文書」	9 3
1. 中国の「呈文」について	9 4
2. 日本使臣の文書と「呈文」の影響	9 6
四、日本側外交文書の執筆について	1 0 4
1. 文例集としての入明記	1 0 4
2. 外交文書の執筆者	1 0 6
おわりに	1 1 1

第四章 寧波における日本使節の貨物検査について —入明記からみる「盤驗」と福建における琉球船の「会盤」をめぐって

はじめに	1 1 8
一、日本・琉球の遣明船の貨物検査開始までの手続き	1 2 1
1. 入明記からみる貨物検査までの手続き	1 2 1
2. 琉球使節の貨物検査までの手続き	1 2 3
二、日本遣明船貨物の「盤驗」と琉球遣明船貨物の「会盤」	1 2 5
1. 入明記からみる貨物検査	1 2 5

2. 琉球使節の貨物に対する「会盤」	1 3 1
3. 貨物検査としての「盤驗」について	1 3 4
三、貨物検査の監督体制及び貨物検査の結果	1 3 7
1. 貨物検査での立ち会い	1 3 8
2. 貨物検査の結果—商品の受納と返還	1 3 9
おわりに	1 4 4

第五章 天文八年の「大内氏」日本使節とその貿易活動 —中国の牙行・商人との関係をめぐって

はじめに	1 5 1
一、日本使節と寧波	1 5 2
1. 寧波の市舶提挙司と日明貿易	1 5 2
2. 中国の「至物」と日本の「異物」	1 5 4
二、天文八年の日本使節と明側の警告	1 5 5
1. 「無藉の牙行」と「奸食の徒」	1 5 5
2. 宿泊施設の嘉賓館と安全対策	1 5 7
三、日本使節・異国使節と牙行とのトラブル—嘉靖年間以前	1 5 8
1. 湯四五郎と朱澄一刀・扇子の「牙行事件」	1 5 8
2. 利益をむさぼる行人と奸人	1 6 0
3. 日本使節の北京での詐取被害	1 6 1
四、正徳六年の日本使節と寧波での「牙行事件」	1 6 2
1. 孫瓚・孫二・汪良佐と「五百余両」の金銭	1 6 3
2. 「五百余両」を取り戻す方法	1 6 5
3. 孫瓚の正体＝官命を受けた牙行？	1 6 7
五、寧波における商品注文と価格交渉—蕭一観との商取引	1 6 8
1. 蕭一観という牙行と釣雲	1 6 8
2. 商品目録と見積もりへの依頼	1 7 0
3. 価格設定と釣雲のアドバイス	1 7 2
4. 釣雲と蕭一観の会談	1 7 4
5. 中国商品の見本—購入か返却かの決定	1 7 5
6. 価格設定に対する再びの注意	1 7 6
7. 低質な器具の見本	1 7 7
六、牙行貿易以外の商品購入	1 7 9
1. 明人との私的交流と交易	1 7 9
2. 范南岡との取引—書籍の注文	1 8 0
3. 日本人の「小さな買い物」	1 8 2

4. 策彦周良の媒介者たち	184
5. 商品の支払い	185
6. 日本使節購入の商品量	187
おわりに	188

第六章 浙江巡撫朱紘の遣明使節保護・統制策と「信票」の導入 —『甌余雜集』と『嘉靖公牘集』からみる

はじめに	194
一、嘉靖二十七年の遣明使節—朱紘との初対面	196
二、「信票」発給の背景について	201
1. 「信票」発給の原因—「奸人」の問題	202
2. 「信票」発給に対する広東の影響	205
3. 『甌余雜集』と『再渡集』における「信票」の記述	206
三、『嘉靖公牘集』からみる「信票」の形態と使い方	209
1. 『嘉靖公牘集』の嘉靖二十七年四月十九日付文書について	209
2. 信票の発給	213
3. 信票と号簿の字号照合	216
4. 号簿への記入	219
5. 貿易取引の後—信票と号簿の返却	220
おわりに	222

第七章 日本の遣明使節と浙江巡撫朱紘 —『甌余雜集』からみる嘉靖二十七年の投書及び金銭詐取事件

はじめに	232
一、遣明使節の警備と嘉賓館	234
二、匿名投書事件と金銭詐取事件について	236
1. 遣明使節の呈文が語る投書事件	236
2. 金銭詐取事件と遣明使節に対する疑念	238
3. 事件についての朱紘上奏	241
三、事件の捜査と担当官の責任追及	243
1. 張德熹に対する疑い—張德熹と遣明使節の呈文	243
2. 張德熹に対する捜査	246
3. 呂朋と莫隱に対する捜査	247
4. 捜査の結果及び判決	248

結 「入明記」が語る日本遣明使節の中国における活動

258

(3) 本文

2020年に出版されるため全文公表ができません。

書誌情報は以下の通りである。

著者 オラー・チャバ

書名 『日本遣明使節と貿易・外交』（仮題）

出版社 吉川弘文館

(4) 参考文献一覧

史料

『蔭涼軒日録』（竹内理三編『増補続史料大成』第二二巻、臨川書店、一九八三年）
王恕「参奏南京經紀私與番使織造違禁紵糸奏状」『王端毅奏議』卷四（『四庫全書』史部、詔令奏議類）

懷効鋒点校『大明律附大明令、問刑条例』（遼瀋書社、一九八九年）

嚴嵩「會議日本朝貢事宜疏」（『明經世文編』卷二一九、南宮奏議、中華書局、一九八七年）

『七修類稿』（上海書店出版社、二〇〇九年）

『殊域周咨録』（中華書局、一九九三年）

周玄暉『涇林續記』（謝国楨編『明代社会經濟史料選編下』福建人民出版社、二〇〇五年、七五～七六頁）

『初渡集』・『再渡集』（『大日本仏教全書』第一一六巻、「遊方伝叢書」四、仏書刊行会、一九八〇年～一九八三年）

商輅「修徳珥災疏」『商文毅疏稿』（『四庫全書』史部六、詔令奏議類二）

『壬申入明記』（牧田諦亮『策彦入明記の研究』上、法蔵館、一九五九年）

錢薇「與當道處倭議」、『明經世文編』（中華書局、一九九七年）

『善隣国宝記、新訂続善隣国宝記』（集英社、一九九五年）

『大乘院寺社雜事記』第一二巻、尋尊大僧正記補遺一（『増補続史料大成』第三七巻、普及版、二〇〇一年）

鄭若曾撰『籌海図編』（『四庫全書』）

張時徹等纂修『寧波府志』（嘉靖三十九年刊本）

張邦奇「西亭餞別詩序」『明經世文編』卷一四七（中華書局、一九九七年）

『東西洋考』（中華書局、一九八一年）

『日本一鑑』

『福建市舶提举司志』（民国二十八年出版、出版社不明）

『甓余雜集』（『四庫全書存目叢書』、集七八、別集類）

『戊子入明記』（『新訂増補史籍集覧』三三、続編一、臨川書店、一九六七年）

『明会典』（万曆朝重修本）（中華書局、二〇〇七年）

『明史』（中華書局、一九七四年）

『明実録』（中央研究院歴史語言研究所、一九六七年）

村井章介・須田牧子編『笑雲入明記—日本僧の見た明代中国』（平凡社、二〇一〇年）

『名臣經濟録』卷七（『四庫全書』史部、詔令奏議類）

余繼登『皇明典故紀聞』卷八（謝国楨編『明代社会經濟史料選編下』福建人民出版社、二〇〇五年、八十頁）

『礼部志稿』（『四庫全書』）

『歴代宝案』（沖縄県教育委員会刊、一九九二年）

『鹿苑日録』（続群書類従完成会、一九六一年）

参考文献

伊川健二『大航海時代の東アジア』、吉川弘文館、二〇〇七年）

伊藤幸司『中世日本の外交と禅宗』（吉川弘文館、二〇〇二年）

伊藤幸司「硫黄使節考—日明貿易と硫黄—」（『アジア遊学』一三二、二〇一〇年）

王川『市舶太監と南海貿易—広州口岸史研究』（人民出版社、二〇一〇年）

王麗萍『宋代の中日交流史研究』（勉誠出版、二〇〇二年）

大庭脩「芳洲文庫の『嘉靖公牘集』について」（『関西大学東西学術研究所紀要』第十輯、一九七七年）

貝英幸「中世後期における地域権力の対外交渉と寺院」（『宗教と政治・佛教大学総合研究所紀要別冊』（仏教大学総合研究所、一九九八年）

蔭木英雄『蔭涼軒日録—室町禅林とその周辺』（そしえて、一九八七年）

片山誠二郎「明代海上密貿易と沿海地方郷紳層」『歴史学研究』第一六四号（一九五二年）

勝野隆信「蔭涼軒日録残簡」（『日本学士院紀要』九ノ三、一九五一年）

川越泰博「『笑雲入明記』にみえる浙江三司および中式举人について」（『中央大学文学部紀要』史学第五七号、二〇一二年）

Kwan-wai So, Japanese Piracy in Ming China during the 16th Century (Michigan State University Press, 1975)

小葉田淳『中世南島通交貿易史の研究』（日本評論社、一九三九年）

小葉田淳『中世日支通交貿易史の研究』（刀江書院、一九六九年）

伍躍「日明関係における「勘合」—とくにその形状について—」（『史林』八四巻一号、二〇〇一年）

佐久間重男『日明関係史の研究』（吉川弘文館、一九九二年）

徐望之『公牘通論』（『民国叢書』第三編・四四、商務印書館、一九四七）

須田牧子「『蔭涼軒日録』（蔭涼軒歴代）—室町殿外交の舞台裏」（元木泰雄、松藺斉編『日記で読む日本中世史』、ミネルヴァ書房、二〇一一年）

須田牧子「大内氏の外交と室町政権」（川岡勉、古賀信幸編『西国の文化と外交』、清文堂、二〇一一年）

須田牧子「大内氏の在京活動」（鹿毛敏夫編『大内と大友—中世西日本の二大大名』、勉誠出版、二〇一三年）

高橋公明「外交文書、「書」・「咨」について」（『年報中世史研究』第七号、一九八二年）

竹田和夫『五山と中世の社会』（同成社、二〇〇七年）

田中健夫『中世対外関係史』（東京大学出版会、一九七五年）

田中健夫「漢字文化圏のなかの武家政権—外交文書作成者の系譜—」（田中健夫『前近代の国際交流と外交文書』、吉川弘文館、一九九六年）

晁中辰『明代海禁与海外貿易』（人民出版社、二〇〇五）

陳越「明嘉靖年間中央客館新考—以策彦周良入明記為基礎史料」（王宝平編『中日文化交流史研究』、中日関係史研究叢書、上海辞書出版社、二〇〇八年）

陳小法『明代中日文化交流史研究』（商務印書館、二〇一一年）

鄭有国『中国市舶制度研究』（福建教育出版社、二〇〇四年）

鄭樑生『明代中日關係研究—以明史日本傳所見幾個問題為中心』（文史哲出版社、一九八五年）

鄭樑生「嘉靖年間明廷對日本貢使策彦周良的處置始末」（鄭樑生編『中日關係史研究論集』第一、文史哲出版社、一九九〇年）

土肥祐子「中流貿易における王銀詐取事件」（『史艸』三五号（一九九四年）

西尾賢隆『中世の日中交流と禪宗』（吉川弘文館、一九九九年）

橋本雄「「遣朝鮮国書」と幕府・五山—外交文書の作成と発給—」（『日本歴史』五八九、一九九七年）

橋本雄「遣明船と遣朝鮮船の経営構造」（『遙かなる中世』十七、一九九八年）

橋本雄「日明勘合再考」（『境界からみた内と外』、岩田書院、二〇〇八年）

橋本雄「再論、十年一貢制—日明関係における—」（『日本史研究』五六八号、二〇〇九年）

橋本雄「大内氏の唐物贈与と遣明船」（西山美香編『東アジアを結ぶモノ・場』勉誠出版、二〇一〇年）

橋本雄「対明・対朝鮮貿易と室町幕府—守護体制」（荒野泰典・石井正敏・村井章介編『倭寇と「日本国王」』吉川弘文館、二〇一〇年）

万明「明代“貢市”与城市変遷—以寧波為例」（『明代中外關係史論稿』（中国社会科学出版社、二〇一一年）

前間恭作遺稿・末松保和編『訓読史文（附）史文輯覧』（国書刊行会、一九七五）
牧田諦亮『策彦入明記の研究』上、下（法蔵館、一九五九年）
村井章介『アジアのなかの中世日本』（校倉書房、一九八八年）
村井章介『国境を越えて一東アジア海域世界の中世一』（校倉書房、一九九七年）
山崎岳「巡撫朱統の見た海—明代嘉靖年間の沿海衛所と「大倭寇」前夜の人々—」（『東洋史研究』第六二巻第一号、二〇〇三年）
山崎岳「舶主王直功罪考（前編）—『海寇議』とその周辺」（『東方学報』第八五冊（二〇一〇年）
熊遠報「倭寇と明代の「海禁」」（大隈和雄・村井章介編『中世後期における東アジアの国際関係』山川出版社、一九九七年）
米谷均「文書様式論から見た十六世紀の日朝往復書契」（『九州史学』、第一三二号、二〇〇二年）
李金明『明代海外貿易史』（中国社会科学出版社、一九九〇年）
李慶新『明代海外貿易制度』（社会科学文献出版社、二〇〇七年）

（５）論文の内容の要旨

論文題目 中世後期の日中関係史研究—「入明記」からみる遣明使節の外交及び貿易活動

氏名 オラー・チャバ (Oláh Csaba)

１．研究背景

本稿は、室町時代に日本から中国（明朝）へ派遣された遣明使節の旅行記録である「入明記」を考証し、遣明使節の中国における外交活動及び貿易活動の実態の解明に迫ることを目的とする。

日本対外関係史の分野では、日明関係をテーマにした研究が多く、「環シナ海域」・「環日本海域」という地域設定と、「外交機関としての五山僧」という外交史の設定が提示された影響で、一九八〇年代以降に特に活発になってきた。五山僧が重要な役割を果たした日明関係に関する研究は、日本の政治史・地方史・禅宗史という視覚からのアプローチが主要であり、「日本国内」にフォーカスを当て、主に日本政治史、禅宗史、地方史という文脈で、日本と明朝との関係を考察してきた。それにより、遣明使節の中国での活動の前提となる、幕府（将軍）・寺社・大名といった勢力の遣明使節派遣との関わりや、遣明使節派遣に与えた影響に対する理解が深まった。

しかし、入明記という史料群の分析は、長い間ほぼ手付かずの状態におかれ、遣明使節の中国における活動に関しては研究が進展してこなかった。

２．研究動向

明代における異国と中国との交流は、明朝が定めた外交制度の範囲で行われ、異国の君主（国王）が派遣した、正式な朝貢使節（遣明使節）の入国しか認められなかった。日本遣明使節は、様々な社会層（武家、僧侶・寺社、商人）の協力によって派遣の準備が行われた。このように準備されてきた遣明使節は、中国で外交と同時に貿易活動を行ない、その活動について入明記のなかに記されている。

近年、入明記と遣明使節を対象とする研究は増えつつあり、入明記のテキスト刊行も行われてきている。ただし、入明記に基づいて遣明使節の中国における活動を体系的に考証した研究は十分とは言い難い。また、入明記の日記の部分と書状の部分を経済史料として使用し、遣明使節の活動を当時の中国の制度に照らしつつ分析する研究も希少である。

そこで本稿では、日本遣明使節の中国での活動の解明を目的として、入明記というコーパスを正面から分析し、研究のフォーカスを「日本国内」から「中国」へ移し、他の朝貢国との比較も視野にいれつつ、遣明使節の活動を中国の外交体制とあわせて考察する。本稿で遣明使節の中国での活動について解明してきた成果は、中世後期の対外関係史研究の全体像を検討するうえで、重要な意義を持つものと考えられる。

3. 研究成果のまとめ

本稿では、遣明使節の外交及び貿易活動について、以下のようなことが解明された。まず、外交活動及びそれに伴う日常的職務について述べる。

中国側の史料と入明記を検討した結果、役者の職務の範囲を次の三つに分類することができる。第一は、外交・朝貢に関連する職務であり、これには貢物点検の時に証人として参加すること、中国外交儀礼を習得すること、皇帝と謁見すること、朝貢と国書を奉じることなどが含まれる。第二は、貿易活動に関連する職務で、これには日本人が困難に遭った時に適切な措置を取り、明側の官僚と折衝し、商品の値段や商人との摩擦などの問題を解決すること、回賜の量を増やすことなどがある。第三として、滞在中の明側待遇の交渉に関連する職務があり、これには滞在中に発生した食糧や宿泊、設備などに関する問題を明官僚に伝えて解決することなどが含まれる。

また、外交活動の一部である、役者による外交文書作成及び役者が作成した外交文書の内容と様式については、次のような結論に至った。まず、役者が中国の官吏に宛てた外交文書の内容は、①明側の使節に対する待遇の改善を訴えるもの、②貿易と回賜に関するもの、③外交事務に関するもの、という三つの課題に分類することができる。また、「現地外交」（＝遣明使節が中国で行なった外交活動）の場合は、国家間外交と同様の上下構造が見られることが解明された。現地の上級官庁や上級官吏が役者に出した文書は全て下行文であった。つまり役者その他遣明使節のメンバーは下級に置かれており、中国国内の下級機関・下級官吏と同様に扱われていた。役者も、中国のルールに従って、上行文を通じて明の官吏や官庁と連絡を取る他なかった。

役者が出した文書は、基本的に中国の書簡様式で作成されたが、中国の呈文という公

文書様式の影響も受けている。しかし、役者は、公文書を執筆する教育は受けていなかったため、明側に宛てた文書を禅僧として馴染みのある中国の書簡様式で書いたが、上行文の呈文で使われる「呈」を取り入れたり、文書の最後に「伏乞」、「乞」などの上行文の言葉を用いたりすることによって、明側が認める呈文という上行文を書くことができた。

次は貿易活動とそれに関連する貨物検査について述べる。

遣明使節は、寧波への到着後に上陸し、遣明船から貨物が陸揚げされた。中国で朝貢品を収め、貿易を行なう前には、陸揚げされた貨物の点検が必要であった。本稿では、寧波における盤驗という検査について考察し、陸揚げの後に進貢物・附搭貨物を対象に数日間或いは数週間に渡り行われ、日本使節のメンバーと地方の高級官吏も参加し、日本使節側の儀礼も重要視されていた、明側にとって重要な検査であったことが明らかとなった。次に、比較史的視点から、『福建市舶提举司志』での琉球使節の貨物検査を検討し、その結果、琉球使節が福建に到着した際、市舶司と三司の官吏をはじめ現地の各官吏が集まり、会盤が行われ、専門の職人がすべての貨物を弁驗したことが分かった。弁驗は、琉球使節のどの貨物を官買するかを決めるために行われ、商品の品質を判断する作業であった。日本使節と琉球使節の貨物検査を比較することにより、盤驗は会盤と同様に、貨物を検査してその品質を判断する作業であることが明らかになった。また盤驗は会盤と同様に、官買の支出を抑える一つ的手段だったことを指摘した。さらに、入明記に散見する「点検」については、『笑雲入明記』・『初渡集』・『福建市舶提举司志』にある貨物検査の記述を比較して解釈を試みた結果、盤驗と同様の意味で使われる場合と一般的な「検査」という意味で使われる場合があるという結論を得た。

遣明使節の貿易活動といえば、私貿易が最も重要な要素であったと考えられる。私貿易は、他の異国使節と同様に、市舶司の行人や現地の牙行（ブローカー）を通じて行われたが、貿易が可能な時間は限られており、中国人に騙される可能性もあった。

天文七年遣明使節の、寧波や寧波―北京間の移動途中で行われた交易について検討した結果、当時の遣明使節はしばしば「無藉の牙行」や「奸貪の徒」との取引を一切しないよう、明官人に注意を呼びかけられていた。その背景には、悪徳の牙行や奸人による詐欺・詐欺事件があり、日本使節を含め様々な異国使節が明代においてそれによって悩まされてきたという、当時の「貿易環境」の実態、特に明側の警告の原因となった貿易の危険かつリスクのある側面が明白になった。

さらに、明側が正式に認定した牙行を経由して行われた私貿易、蕭一觀という牙行と日本使節との商取引について考察し、牙行との私貿易による商取引のプロセスを復元した。牙行による貿易以外の商品購入については、寧波での商品購入の一部は、日本使節が交流していた文官・文人・僧侶によって実現されたが、牙行貿易より規模が小さいものであった。

嘉靖二十七年（一五四八年）遣明使節の外交・貿易活動に深く関わっていたのは、本稿で取り上げた浙江巡撫の朱紘であった。

本稿では、朱紘の文集『璧余雜集』、『嘉靖公牘集』、『再渡集』を検討し、次のような状況を明らかにした。朱紘は、「夷人」と中国の「姦人」の間にしばしば起きる貿易トラブルについて調査し、「夷人」は、中国の商人や牙行に騙されることが多いことを知った。そこで彼は、遣明使節が、以前から異国使節にとって大きな問題だった牙行や商人による詐欺事件の被害に遭わないように、遣明使節を守る対策を講じ、「信票」による取り締まりを提案した。そして、彼の提案の通り、「信票」と照合するために必要な「号簿」が遣明使節に与えられた。「信票」は、浙江における対外貿易の対策として新しい試みであった。朱紘は浙江（寧波）での対外貿易の現状を不満に思っていたため、信票制度によってそれを改善し、掛け売り・掛け買いによる詐欺をなくそうとしていたのである。

また本稿では、嘉靖二十七年に遣明使節が寧波滞在中に起きた、同じく朱紘と関わりのある、投書及び金銭詐欺事件に注目した。これらの事件を復元した結果、まず朱紘の国内政治における活動の一面、即ち巡撫として浙江按察司と共に事件の捜査と官僚に対する追及を行ったことが分かった。これにより、寧波にいる官僚の公務不履行と奸人との癒着の実態がより詳細に確認され、朱紘と官僚の対抗関係を具体的な事実によって裏付けられた。朱紘が行った一連の取り締まりは、官僚のモラル改善と庶民の官僚に対する信頼回復を意図したものであった。

さらに、二つの事件を巡る朱紘の遣明使節への対処過程とともに、遣明使節の寧波での活動の様子も明らかになった。遣明使節への対処を任された朱紘は、嘉賓館の警備を万全にし、奸人問題を警告し、遣明使節が商取引の時に被害に遭わないように努めた。しかしながら、遣明使節のメンバーが朱紘の警告に従わず奸人と密かに接したため、結局以前の遣明使節と同様に金銭詐欺の被害に遭ってしまうのである。

以上のような、明における遣明使節の外交・貿易活動の様相を見ると、遣明使節とその中心となった役者は、中国で、官吏との対面、貨物検査、貿易、皇帝との謁見など、様々なレベルの場面での対応及び解決する能力が求められた。だからこそ、遣明使節の派遣は、蔭涼軒主が幕府奉行人や他の五山僧とともに行った人選が大前提となった。

そのため本稿では、遣明使節派遣の前提となる、遣明使節の準備過程のなかで最も重要であった役者人選に注目し、『蔭涼軒日録』の明応二年遣明使節の準備に関する記述を取り上げ、文明十八年から明応二年までの間に蔭涼軒主亀泉集証が中心となって進められた役者人選について考察した。その結果、当時の人選過程を復元することができたとともに、人選が途中で二転三転した理由として、役者の健康問題や年齢のほか、詳細ははっきりしないものの、役者候補者が大内氏との関係のために辞退した事例や、士官に俗人を任命するという先規に対する蔭涼軒と幕府の認識のずれなどを指摘した。また、役者人事に際して、なんとか遣明使節のメンバーになろうと、自薦者や虚言者が現れていることが興味深い点の一つとして挙げられる。

このような人選により「然るべき仁体」、つまり役者となる適切な人材が選ばれたわけである。「日本国王」の代表として外交任務を明の規則通りに順調に遂行し、経営者

や遣明船と関わりのある商人・寺社・大名の貿易利潤を確保するためには、その能力のある人材が必要であった。同時に、中国側の待遇が問題になった時に、中国側に「愁訴」し、反対の意を示し交渉できる人材が求められていた。蔭涼軒の人事で役者になった五山僧や俗人にとっては、明側との交渉が主な任務であり、その日常的な苦悩は入明記からにじみ出ている。

本稿では、明の外交体制と照らしながら、遣明使節の明における外交・貿易活動、および明側の対応について、その実態にせまり、またそうした経験を通じて日本側に蓄積された遣明使節派遣に関する外交慣習を論じてきた。ただし、本稿でも一端が示されたように、遣明使節の中国での活動と、出発前の日本における人選は切り離して考えることができない。今後の研究では両面からの総合的な検討をさらに進める必要があると考えている。